

第24回 2014年4月23日(水)

ゲスト 川越 亨 (テレビ大阪 元専務取締役)

テーマ 放送史に残る名物番組の軌跡を追う

「天神祭、第1回御堂筋パレード、そして、やしきたかじんとのお会い」

主な内容

◎テレビ大阪 開局は1982年 「地域密着・都市型・経済」が三本柱

◎NET(現テレビ朝日)での“休業”のあと 日経映画社へ

◎念願のテレビ局へ 転職先は開局直前の「テレビ大阪」

◎“テレビ局を作りに行く” まずプロダクションとの交流深める

◎放送現場 東京と大阪の違いに戸惑い

◎開局の日 ‘82年「3月1日」の番組表から

◎“お悔み申し上げます” 「訃報」がテレビのミニ番組に

◎深夜の放送ながら、サラリーマンには必見の番組へ

◎ゴールデン枠で「天神祭生中継」 開局から30年以上続く

◎祭りの関係者に仁義を切る 生中継の根回し

◎在阪5局が初のリレー生中継 御堂筋パレード第1回制作秘話

◎やしきたかじんとのお会い 「今夜はうしみつ族」で司会グループへ

◎築き上げた人脈 後輩プロデューサーへ引き継ぐ

◎“テレビに見るものない”の意見に 見る側にも“探して見る”努力必要

司会 暑くなりましたね。朝、ちょっとひんやりとしていましたが、今日は、テレビ大阪の川越亨さんにお越しいただきました。元テレビ大阪専務でいらっしゃいまして、東京生まれの東京育ち。テレビ大阪が出来てから、大阪に来られたという。ご承知の通り、テレビ大阪は1982年、昭和57年3月1日に、放送を開始しています。本日は、川越さんに社史（30年史）をお持ちいただきました。1982年3月1日のテレビ欄が出ています。それを裏返しますと、これは最近の社報だそうです。やしきたかじんさんが亡くなられて、“ありがとうございました”ということで、番組で関わったプロデューサーやディレクターの思い出が記されています。のちほど、若い頃のやしきたかじんさんとの出会いなど話して頂きます。たかじんさんが出演した番組の初代のプロデューサー川越さん、それから森川さん、徳岡さんって方が引き継いでいらっしゃるそうなので、その辺りも含めて伺いしようと思います。まずは、川越亨さん。「かわごえ」さんかなって、僕は、最初思っていたんですけど、「かわごし」さんでいらっしゃいます。川越亨さんをご紹介します。

川越氏 「かわごし」です。でも、もうほとんど、8割は「かわごえ」ですわ。「かわごえ」で、もう返事するようにしていますので。

<テレビ大阪 開局は1982年 「地域密着・都市型・経済」が三本柱>

司会 テレビ大阪は、ほかのV局から、だいたい24、5年ですかね、遅れて、いわゆる都市部でスタート致しました。大阪府域をエリアにするUHF局で、ここにも書いてあります、「誕生と開局」というところにね。ご覧いただくとお分かりでしょうが、① 地域密着、② 都市型、それから③ 経済、を3大方針に挙げてのスタートでありました。ご承知の通り、日経新聞が株主ですから、報道、ニュースというのは、なんとなく何とかあったんだろうなという想像がつくのですが、はたして制作に関しましては、どんな風にして番組制作能力を構築していかれたのかについては、なかなか想像の及ばないところでもあります。今日はその辺りを、川越さんのお話で解き明かしていこうという風に思っております。大阪とは、縁もゆかりもない川越さんが、どんな風にして東京から大阪に来られたのかなという辺りのお話を。まずは、若き頃の川越さんの生活についてですが、大学時代から、当時のNET（現テレビ朝日）でアルバイトをされていたと。この辺りからお話を伺おうかと。

川越氏 私は、昭和20年生まれ、高校を出て、1年浪人して大学に入りましたんで、学生運動が真っ盛り。ほとんど授業なんか無い状況の中で、たまたま、うちの姉の旦那、義理の兄貴が、当時の日本教育テレビ、NETで仕事をしていた関係で、ADのバ

イトを始めるんです。ほかのバイトの1.5倍くらい、給料良かったですからね、それにかまけて、ほとんど学校にも行かずに、丸4年間、学生ADという形で、正に、日本教育テレビの教育たる所以である、教育番組部に籍を置いたに等しいくらい、べた入りしまして。ちょうど、NETはワイドショーの立ち上げをやっていた頃で、「アフタヌーンショー」、「木島則夫モーニングショー」、そして「徹子の部屋」も始まって、教育番組と称して、いろいろなバラエティーをスタートさせた時期です。そんな中で、教育番組に付いて、ジェームズ・B・ハリスさんの「百万人の英語」のテレビ番組をやってみたり、社会科の番組をやったり、理科とか音楽の番組とかいろいろと経験させてもらいました。

その後、自分がディレクターをやるときに良かったと思うのは、教育番組ですから、相手は子供で、いかに丁寧に分かりやすく作るかっていうノウハウが自然に養われて、結果的にはいい4年間を過ごしたと思います。

NETではスタジオ関係の仕事ばかりしていました。そのとき、20歳でして、今でも時々、スタジオの仕事を年に1本ぐらいは面倒みたりはしています。スタジオに入って来年で50年になります。

——— それから後、どんな風な展開になるんですか。

川越氏 中学の時から、放送部に入っていたんです。高校も放送部と写真部の2本立てで。基本的には放送局で仕事したいというのが、何となく子供のときからあったんだと思います。もちろんNETも、アルバイトは社員として採用しません。そういうこともあって、選曲していた方の紹介で、日経映画社に入社しました。ちょうど映画業界、短編とか記録映画の、フィルムを中心としたプロダクションにも、だんだんテレビの波が広がってきて、テレビ番組を作るようになるんですね。日経映画社もテレビ番組を作らざるを得なくなってきた、そうするとテレビを経験していた人間が欲しいということで、スタジオワークも含め、日経映画社には誰もいないですから、ぼっとそこに納まったということです。

日経映画社というのは、真面目でありますので、産業映画とか記録映画、それからいろいろな企業のPR映画、スライドも含めてですけど、そういう作品を作っていました。テレビ番組も、テレビ東京のどちらかというと役所関係の番組が多く、僕も、そういう番組を持つというか、即ディレクターにされたんです、新入社員で。キャスティングでいろいろタレントを使って、真面目な番組もバラエティーにしていくようにやってまいりました。

<NET(現テレビ朝日)での“修業”のあと 日経映画社へ>

——— 映画社に入られたってことは、まずはフィルムが使われたんですかね。

川越氏 そうですね、16ミリフィルム。映像と音が同時に収録できる同録の16ミリというのもまだまだ多くはなくて、テープレコーダーで音声を録音し、カメラで撮った映像に、後で強引に合わせるといふ、そういう時代でした。だんだんそれが、16ミリでいうと「アリフレックスBL」であったり、「エクレール」であったり、同録できるカメラを使い始めました。2年ぐらいすると、あの重い「SK-80（日立の業務用ビデオカメラ）」などが登場する、ビデオの時代になっていきましたね。

——— ビデオに関しては、NETでのアルバイト時代に経験しておられたわけですね。

川越氏 2インチで番組を収録する、というのはNETでやっていましたが、まだフィルムが多かったですよ。

——— そうすると、フィルム時代からビデオ時代に入っていくときに、日経映画社で、ビデオの分かるスタッフとして、結構、重宝がられたということですね。

川越氏 そうですね。特に、ビデオといっても、スタジオ制作ができる、2カメ、3カメが使えるような仕事は、フィルムのディレクターたちはできないですから、そういう部分は多かったと思いますよ。トーク番組やなんかが多いですから、真面目な番組は、総理府の番組でいうと土居まさる・・・司会者の土居まさるさんは早くに亡くなったけど。土居さんに頼んで、そこに芸人や落語家をゲストを入れたりして、バラエティー風に、総理府のテーマをこなしていました。またちょうど日清食品のカップヌードルが出たときです。基本的には、日清食品も関西からスタートして、関東地方にプロモーションに入るわけです。そのときに「3時のおじゃまクイズ」という、午後3時に30分間、月～金で。大きいワゴン車に日清食品のディスプレイをして、ガバッと開けるとカップラーメンが山積みになっているというような車をステージにして、団地へ行ったり、街へ行ったり、繁華街へ行ったり。それを1日3本撮りですね。30分番組3本、週2日くらい稼働していました。それを2人のディレクターで回していたんです。それを宮尾すすむさん、あの社長シリーズで有名な。全部通しました。

そういう一風変わった日経映画社の人間ですが、そんなことを見てくれた上司がいたんだと思いますよ。

——— さて、そんなある日に、いよいよ大阪行きの話が沸き起こってきます。大阪に日経系列、2局目のネット局が出来るそうだと。どなたか偉い方が、誰を連れて行ってもいいよと言われた方がおられて、その方が「じゃあ川越を」と。よく

ある話ですけど、運命が変わっていくわけですね。その辺はどうだったのですか。

川越氏 その日経映画社の制作部長、もちろん日経の文化部出身の方が、まあ、上司になるわけですが。その人が部会で、大阪で日経が放送局作るよと。テレビ東京でネット張るよという情報だけ流して、行きたい奴があったら手挙げろって。結構いちびって何人か、手を挙げたりもしていました。1年後くらいに、日経映画からも人を出すと。吉田さんという制作部長も初代の制作局長としてテレビ大阪に行くんですけど。「俺、大阪へお前連れて行く」って、いきなり言い出したんですよ。ある種の感動を覚えましたよね。

——— だから、ずっと見ていてくれたんだ。

川越氏 だと思います。

< 念願のテレビ局へ 転職先は開局直前の「テレビ大阪」 >

川越氏 やっぱり放送局は魅力ありますよ、プロダクションにいたら。テレビ東京でいろいろ仕事に接してはいたけれど、私はテレビ東京の人間ではないですから。だから、そのときの、局対プロダクションというある種のコンプレックスみたいなものもね、自然に身に付いていたとは思いますが。

——— でも、東京暮らしと申しますか、生まれ育ったところを、まあ、ある種、大阪に行って、永住しなくちゃいけない。長く住まなくちゃいけないっていうのはあったでしょうね。

川越氏 まあ、でも、あんまり考えずに、面白そうだから行ってみようかなっていうのが強かったですよね。

——— おいくつだったんですか。

川越氏 僕 35 ぐらいですよ。35、6。

——— それで、大阪での、身分って申しますか、待遇って申しますか。

川越氏 テレビ大阪の開局時。32 年前、昭和 57（1982）年の 3 月開局です。制作局演出部主任ですね。

——— これ、なんか、古いですね（会社の組織図を見て）。

川越氏 手書きですね、会社の。これ新聞社に送った広報資料のはずです。

——— そうですか。

川越氏 制作局は 7 人しかいなくて、制作局の中には、報道部とスポーツを兼ねた演出部というのがあるんです。その演出部は、部長を入れて 4 名。

——— もちろん経験者は少ないでしょうね。

川越氏 経験者は一人、スポーツ中心に寺尾さんという、テレビ東京から来てくださった部長がいます。スポーツしかやってない寺尾さんが、いきなり開局時には米朝さんの落語を担当したりしていました。

——— 大阪に行くに当たっては、大阪弁を覚えなきゃいけないとか、いろいろと言われたんだそうですね。

川越氏 東京の日経映画社で番組を作って 13 年。千代田ビデオや東通など、カメラマンたちといろいろな話をする中で、「大阪へ行くんだってな」と。彼らは大阪にも行って仕事をしていますし、東通なんてこっちでも仕事している。そんな彼らに関西弁使わないと、サブからカメラマンに指示するとき、言うこと聞いてくれないって言われて、ほんとかなど。東京だと、普通、「はいズームインして」とか、「ちょっとパンして」とか言うんですけど、大阪はそれじゃ駄目だと。「ズームかまして！ズームかまして！」って言わないとズームしてくれないというのです。

——— ほんまかいなって話ですけどね。

川越氏 じゃあ、パンは？って。「パンこいて！」「パンこけ！パンこけ！」って言うらしいですよ、そういう話を聞いたりなんかしてですね。ああ、そんなとこ、怖いな、みたいな印象を持って、大阪へは乗り込んでいきました。

やっぱり、関西弁で手こずりましたよね。一番困ったのは、開局して半年ぐらいしてから、ぶっ通し 5 日間、一人のアーティストを撮りまくって、深夜に 1 時間番組、5 本、放送したんですよ。そのトップバッターが鶴瓶さんでした。名古屋行って、東京行って、京都来て、大阪来てと鶴瓶さんを日本中、ずっと追っかけ回

していた番組。彼に話をするとき、“つるべいさん、つるべいさん”ってなっちゃうんですよ。それを脇の人たちが聞いていて、川越さんおかしいよ。“つるべ、つるべ、つるべ”って言うんだよって。それが言えない。じゃあ、もうしょうがないから、名前を言うのをやめて、師匠と言おうと。で、ずっとつるべさんには師匠で通しました。という、まあ、若干ハンディキャップもあったんじゃないかと思います。でも、まあ、アナウンサーにとっては、いい師匠になりましたよ。

—— ああ、そうですね。お目にかかったときから、この方は、東京っ子という感じのする方だなと思っていました。喋りも早いですし、歯切れもいいから、大阪の人ではないなと思ってたんですけど。大池アナウンサーなんかは、随分指導されたんですか。

川越氏 大池は、うちの中堅のアナウンサーとして、東北の放送局から、来たんだけど。東京の文京区出身なので標準語 OK でした。

—— そうですね。あまり指導の必要はなかったですか。

川越氏 そうですね。ほかに、岡山出身のアナウンサーとか、大阪出身、広島ホームテレビから来たアナウンサーとか。でも、テレビ東京からのアナウンサー部長が来ていて、ちゃんとイントネーションも含めて、標準語喋れって、結構うるさいんですよ。僕は関西弁でいいと思うんだけど。見ていて可哀そうだから、時々教える、直すってことはしていましたけど。

—— ところで大阪に来られて、番組を作るためには、仕事を一緒にしてくれる人たちを探さなくてはいけないということですが、どんなことから始められたんですか。

< “テレビ局を作りに行く” まずプロダクションとの交流深める >

川越氏 そうですね。東京で仲間たちが送別会やってくれた席で、皆に宣言したのは、自分は番組を作ってきたから、大阪へ行っても、番組は作りたいと思う。テレビ大阪に移れば、番組じゃなくて、テレビ局を作りに行きますよと言いました。番組だけ作っていても良くないと思うし、まあ、年齢的にも 30 代半ばで中堅ですから。大阪に来て、演出部 4 人じゃ何も出来ない。企画や何かは編成も含めて、皆で集めてくるし、売るのも営業がスポンサー見つけてくるからいいんですけど。僕は、基本的にはプロダクションにいたものですから、徹底的にプロダクションと仲良くしようと決めました。無意識のうちに仲良くしなくちゃいけないと思ったもので、古くは OTVF ってありましたよね、OTVF と東通企画、エキスプレス、放送映画

社、それから IVS ですね。それと毎日 OB の社長の会社 JAP' S とか。もちろん吉本興業、松竹芸能、この辺も制作力あるので。あと、タレントプロでいうと、米朝さんとことか、和光プロとかですね、結構、バイプレイヤーを抱えている小さいプロダクションもあるんです。もう、徹底的に付き合いました。皆来て下さるんですけど、こっちから行きました。大体週に 1 社ぐらいとは夜、飯を食うと。しかも、社長はいらんと。現場をやってくれる人たちと仲良くしないといけないなど。面白かったですね。いろいろな人がいて、さすが大阪は個性的で。特に社長たちも超個性的ですよ。どちらかという、僕は個性がなかったんじゃないですかね。結構皆、可愛がってくれました。

——— そこには、いわゆる、社員が少ない分、外部勢力に力を貸してもらわなければいけないっていうのがあったんですね。

川越氏 もちろん。こういう番組やってくださいっていうんじゃなくて、具体的に何もなくても、人間関係持っていないといけないなという気がしたんでね。で、開局 3 か月前に来て、3 か月後に開局して、もうその秋から新しい 10 月編成になるわけじゃないですか、秋の番組企画、制作はほんと、ドタバタですね。

——— あんまり寝る暇なかったんじゃないですか。

川越氏 もう、家で寝るのは 3 時間ぐらいかな。

——— どこに住んでいらっやったんですか。

川越氏 テレビ大阪はご存知のように天満橋にあるんです。近いところがいいなど。東京の知り合いに頼んで、どこか公団でいいところないかって言ったら、探してくれたんですね。森ノ宮、長柄の方、天八、天六界限などいろいろ候補にあがりましたが、結局、「リバーサイドながら」ってところに入りました。あれはもう、天八の延長線上ですから、そのままずっと天神橋筋歩いてくると、扇町通って、また川沿いに歩いてくるとテレビ大阪があるわけです。まあ、自転車半分、車半分、歩き半分ぐらいで。非常に近いから、ちょっと帰って、寝て、さっと来られるし。ちょうどアパートの下にガソリンスタンドがあって、タクシーが年中、止まっているんですよ。当時はタクシー乗り放題でしたからね。

——— まあ、当初はね、どさくさに紛れて・・・

川越氏 だから、ほんの、例えば一駅、二駅の移動もタクシーで。皆、スタッフにも言ったんですけど、「タクシー乗れ」と。「どんどん乗って、タクシーの中でのもの考えたり、寝たりしろ」と。自分も含めて。というやり方していました。

<放送現場 東京と大阪の違いに戸惑い>

——— 東京で仕事をされていて、夜現場におられて。大阪でこの現場の人たちと付き合い始めて、東阪の違いみたいなものって何かお感じになりましたか。

川越氏 よく言えば、皆和やかに楽しげにやっている。だけど、何となく、こう、仕切られてない、誰も仕切らない、何かルーズにやっている。でも、結果的に番組が出来ていっちゃうような作られ方ですよ。だから、スタジオ本番に入るまでの、1時間、2時間にしても、何か知らないけど、どろどろって入っていっちゃう。やっぱり、東京でやっているときは、誰かが「じゃあ、あと5分でリハーサル」、「リハーサル終わったら15分後に本番」。そういう仕切っているのがいたんです。一番驚いたのが、フロアが3人も4人もいてですね。一人の役者に、タレントに、全員で「1分前」って合唱するんですよ、スタジオで。もう、参りましたけどね。3人で言うことないだろ！

——— 東京では誰か決まった人が言っていたんですか。決まったADが言っていましたか。あの1分前とかいうのは。

川越氏 やっぱりセンターのAD、フロアディレクターが、時計に関しての指揮や、上からの連絡をします。タイムキーパーが完璧にいましたから。

——— ほとんど、番組を作った方は、局内にはいらっしやらなかったですかね。相当、川越さんには、いろいろな負荷がかかってきたでしょうね。あれもやれ、これもやれみたいな。

川越氏 そうですね、いろいろな番組、報道も、スポーツからも、あるいは編成も、プロデューサーやったりしていたんですけど。とりあえず現場だけは全部顔出す。収録現場、撮影現場に行くことでプロダクションとつながるんですよ。

やっぱり、局の人間が来てくれたという部分でとても嬉しいんですよ、プロダクションの人間としては。一つの番組は一つの家族ですから。どうしても、プロダクションのディレクターと局のプロデューサーの会話の中でね、どちらかというとか「さん」付けになったりするじゃないですか。じゃなくて、プロダクションのディレクターに対しても、呼び捨てでいきました。スズキとかキムラと

か。逆に彼らもそれに対して、別に、変な感じじゃなくて、フランクに受けとめてくれ、フレンドリーな人間関係を作れたかなと思います。それから、カメラマンには、1 カメ、2 カメ、3 カメですぐ呼んじゃうんですけど、これ、昔からちゃんとカメラマンには名前を呼ぶ。1 カメこうしろ、2 カメこうしろ、3 カメこうじゃなくて、あの、なんとかさん、なんとかさん、とかね。名前で言うように、それは心がけました。だから、サブにね、モニターがありますね、1 カメ、2 カメ、3 カメと。全部下にカメラマンの名前を貼り付けていました。

—— ああ、なるほどね、ああ、サブのところに。

川越氏 そうです。まあ、それは皆がやっていたわけではないですが、僕は自分で書いて、貼っていました。

—— で、やっぱり、「ズームかまして！」とか言ったんですか。

川越氏 言えなかったですね、さすがに。だって、分からないんだ、ニュアンスが。今なら分かるけど、「かます」とか、「パンこけ」とかいうのは。

<開局の日 ‘82年「3月1日」の番組表から>

—— いよいよ 開局になったんですが、この開局で、あの、どの番組が、どんな風に・・・

川越氏 これ、たまたまここにあるのは（社史）、開局した、1982年3月1日の番組表です（次ページ）。この日は 開局ですから、特番も結構あるんです。午前7時、朝の、「レッツ！ジャズ体操」ってのがありますね。これはIVSプロダクションの制作ですね。福井の砂浜で、レオタード着せて、5人ぐらい踊ってくれました。その後、8時10分、これが何と生の開局特番ですね。「誕生！テレビ大阪」ってのが。これは、スタジオからの生放送です。これはディレクターとして、D卓に座っていました。東阪比べるっていうのがあって、大阪城が映って、スーパーしなくちゃいけないのに、慌てて、「江戸城」とスーパーして、放送事故1号。

—— 江戸城、きましたか。

川越氏 大阪城ってまだ感覚になっていない。タイムキーパーも東京から呼んだスタッフですから。司会の岡本隆子さんは、仁鶴さんの奥さまですね。

（番組表は次ページ）

テレビ大阪 開局日 (1982年3月1日) テレビ欄 (日本経済新聞)

- 6 00 唐招提寺への道
30 ニュース 50 記者会見
- 7 00 レッツジャズ体操 05 おはようスタジオひょうきん大会&象登場
- 8 05 おはよう毎日健康
10 「誕生 テレビ大阪」 山本堅太郎 岡本隆子
- 9 00 大江戸捜査網 54 買物
- 10 00 きょうの株式
30 東京・大阪両知事対談「明日の都市文化」
- 11 00 じゃじゃ馬億万長者 30 誕生 歌うホープさん 45 番組 50 天気 55 クイズ
- 0 00 春の大阪まつり 五木ひろし フランク永井 八代亜紀 村田英雄
ミヤコ蝶々 都はるみ 仁鶴 水前寺清子
1.40 経済ニュース 50 ニュース 買物
- 2 00 映画「タランチュラ殺人事件」(1975年米)
- 3 3.25 ジャズ体操(再) 3.30 株式 45 夕刊 55 天気
- 4 00 景気討論会「57年度の景気を占う」
下村治 吉富勝 金森久雄 片瀬春海 井上毅
- 5 25 音頭 クイズ 30 ニュース 52 天気
55 アニメ親子劇場「火の戦車物語」
- 6 25 漫画猿飛佐助 54 のりもの百科 天気
- 7 00 スペシャルバラエティ「夢の超特急メガTON号」 夢の競演爆笑真剣勝負
三波伸介 萩本欽一 横山やすし、西川きよし 沢田研二 タモリ 浅丘雪路 武田鉄矢 前川清 紳助・竜介 松田聖子 三原順子ほか
- 8 54 ガイド 57 釣り情報
- 9 00 特別ロードショー「アイザック・スターン中国に行く」
(1981年度アカデミー賞ドキュメンタリー部門最優秀賞受賞作品)
- 10 34 クイズ 37 天気
40 サウンドブレイクスペシャル
- 11 00 新・東阪文化異論 木村尚三郎 竹村健一 戸塚文子 山崎正和ほか
54 クイズ 天気 記者会見
- 0 10 ニュース
20 音頭 「お悔み」
25 痛快 河内屋宗俊
- 1 20 テレビ予備校「英語」

川越氏 その日のお昼の「春の大阪まつり」、これは演歌の歌祭りです。

川越氏 夜10時台の「クイズ」っていうミニ枠がありますね。開局にからめて、クイズに答えて、視聴者に海外旅行をプレゼント。視聴者を増やそうというアンテナ対策クイズです。アンテナ買ったら、どこかに行けるみたいな。それとリンクしたクイズ系の番組です。

それから、夜11時台の枠の中の、0時10分、「20分音頭」というのがありますね。これは、開局に合わせて「大大阪音頭」というのを作ったんですよ。歌詞を募集して金田たつえさんとか、5人くらいの歌手が共作しました。残念ながら、展開につまずいて、結局、楽曲は出ましたけれど、ヒットはしなかったですね。なかなかいい曲だったんですがね。復刻版を作ってほしいです。

その隣、深夜の時間帯に、「お悔み」と三文字で表示されている番組がありますが、これが、特にビジネスマン必見のミニ番組となりました。テレビ番組としてはちょっと異色の番組です。

< “お悔み申し上げます” 「訃報」がテレビのミニ番組に >

——— 開局の日から、やってらっしゃったんですか。

いよいよこのお話になります。公益社提供、「お悔み申し上げます」。公益社提供というのが、いいですね。いかにもそれらしくて、まんまって感じがしますけれども。

川越氏 さっき、開局の精神を話しましたが、要するに、経済であり、都会型であれ、もう一つは、やっぱり、ローカルの地域に密着せねばいかんというコンセプトで、まあ、それに非常にはまったなと結果的には思うんですが、ミニ枠で3分枠の、「お悔み申し上げます」というのを編成したんです。月～金で、深夜のこの時間帯24時22分から3分枠、金曜日はもうちょっと深い時間帯です。内容は本編1分15秒。電通から出向でテレビ大阪に来ていた中村さんという方が、テレビは娯楽でもあるけれど、やはり生活の道具なんだと口酸っぱく言っていました。そういう意味では、新聞の訃報は、やっぱりビジネスマンが必ず見ますね。テレビにも訃報を伝える枠があってもいいだろうということで、訃報番組がスタートすることになったんです。

番組では原則、4名の訃報を文字表示と音楽で伝える。15秒の4枚、テロップ4枚。死亡1、死亡2、死亡3、死亡4です。タイトルとエンドタイトル、あと提供。そういった素材を自動送出で放送していました。

訃報の情報は、公益社からと、同時に新聞社から、日経の報道からも入ります。

担当者はそれを夜の 10 時から 10 時半の間に 4 人選ぶわけですね。それをすぐ写植、テロップ屋さんを書いてもらって、どこどこの何々さん、享年いくつ、お通夜はいつ、お葬式はいつ、どこでというただそれだけの情報を伝える。ただ毎日毎日 4 名は出せない。そのときにどうしようってことで考えたのが、ランダムに使える「お悔み一口メモ」を 15 種類くらい用意して、献花の仕方、焼香の仕方、香典の出し方など、宗教によってはこうあるべきとか、不祝儀の袋の裏によく書いてある文言を 3 行ぐらいのメモにして、それが、一人のときは 3 枚使うし、二人のときは 2 枚使う。で、それで毎日 4 枚出せるという。報道の天気予報が深夜にあるので、その天気予報のスタンバイと「お悔み」のスタンバイを、学生アルバイトが一人でした。マスターに素材を揃えて渡すのが深夜 23 時まででした。放送はもっと後ですけど。

<深夜の放送ながら、サラリーマンには必見の番組へ>

特に金曜日は、酒飲んで帰った各企業の、総務なり、人事なり、秘書なりの方々がこのミニ番組を見るようになったんですよ。新聞は朝刊が来ないと見られない。当時はね。今はネットでバンバン出るけど。朝まで待つんじゃなくて、朝見て初めて分かるという、トゥー・レイトがあるので。家帰って、酒飲んで、寝る前にこれをチェックして、何かあったら連絡する。何もなきゃ寝る。

——— 夜のうちに連絡出来ちゃうこともあるんですね。

川越氏 日経の訃報に出るような方は、絶対にこの番組にも載ったんですよ。そういう意味では、“生活の道具”としては使えたなと思っています。結構 1 年半ぐらい続いたんですよ。

——— 惜しいですね。もうなくなっちゃって。

川越氏 ところがですね、当時はまあ、開局直後ですから、営業もそんな売れてないし、その辺の深夜の枠の力なんか弱いものですよね。でもだんだん、深夜も強くなってきて、1 年も 1 年半も経つと、その時間帯が売れるようになってきた。あるいは、スポットも埋まるようになってきた。そうすると、スポンサーからは、あの番組の後はやめてよとかですね、そういうのが出てきちゃったんですよ。

——— なるほど、そんなもんですかね。その番組の前後って、結構視聴率高いと思いますけどね。

川越氏 でも、やっぱり、縁起がね。ということで、1年半ぐらいで、残念ながら、終わったんです。ただ、これは、他局の人も見ていてくれて。いろいろな局の人に、「いいね、あの音楽は」って。コメントないですから、選曲大変なんですよ。

—— コメントなしで、音楽だけを流しているという・・・

川越氏 BGM は、何パターンかあって。その当時、“AR(エアール)” っていうってましたよね、何か、がっちゃんとかやるやつ（装置）。その中に何曲もあって、その中から何曲目、何曲目と指定しているだけで選曲できたんです。選曲屋さんが年中、チェロの音楽ばかり聞いていましたね。

—— 一番それらしいかな、なんていう・・・

川越氏 そこで、あの、タレントの嘉門達夫がやっていた「ぼくらは怪しいサラリーマン」（毎日放送）という番組があったんですが、その番組が年末に今年の“怪しいサラリーマン番組大賞”を選ぶんです。

—— 「怪サラ大賞」ですか。

川越氏 ということを選定していて、テレビの部でこの「お悔み」番組が選ばれたんです。その番組で紹介されたし、こんなトロフィーわざわざ持ってきてくれました。

—— でも、この作り方のアイデアは、多分東京時代に何にもないところから、ひねり出さなきゃいけないという、そういった訓練といいますか、経験が何かものをいってんですかね。

川越氏 それはあるでしょうね。まあ、要するに、金もない、しかも、人もいない、時間もなし。そのような番組をいかに合理的に作るかというのは、ある意味、綿々とその後も続きますね、

—— 後発局で少ない人数で、何かを作っていくかなくちゃいけないっていう中での、大変大きな工夫だったんでしょうね。

川越氏 だと思います。やらなくてはいけないし、やりたかった。本当に番組を数多く作りたかったんです。断るのは簡単だし、そんなの出来ねーよで終わっちゃうんだけど。後輩の森川と二人で何でもいからやるよと、何でも持って来いよって

言っていましたね。

＜ゴールデン枠で「天神祭生中継」 開局から30年以上続く＞

——— 小さい番組があって、今度は天神祭。中継のアイデアと実際というのを伺いしようかと思います。これは、V局はやっていなかったんですか。

川越氏 民放のV局はやってなかったはずですが。まあ、ニュースやなんかでは取り上げていたと思います。一つだけやっていたのはNHKですね。最初3年間ぐらい、NHKは生中継していたと思いますが。

川越氏 開局当初は、テレビ大阪なんて、誰も知らないんですから。それを、何しろ3年で定着させる。タクシーにテレビ大阪って言ったら、ラジオ大阪じゃなくて、テレビ大阪に行ってくれる、という時代を早く迎えなくちゃいけないという意識も強かったんです。そういう意味では、祭りはやるべきだと主張しました。

テレビ大阪は、大川端にあって、屋上があったんですけど。そこじゃなくて川岸に、NHKと並ぶようにして、栈敷を、ステージを作ったんです。行き交う船に脇から照明当てるんですよ。NHKの照明はアーチェリーさん（照明プロダクション）がやっていたんですね、アーチェリーへ行って、半分、分けてくれと。NHKへ行って、一緒に使わせてくれと。お金は半分ずつにしましょうと行って、NHKと交渉したりしましたね。

初代の司会が藤本義一さんでした。いろいろなゲスト入れたりして、祭りは中継出来ました。それ以来、7月25日は天神祭の中継というのが恒例になりました。

だから、今年もやります。夏の大イベントですね。いわば、この日はテレビ大阪の日なわけですね。天神祭は、日にち決まりですから、年によって、曜日が違ってくるんです。それで一番困るのが、テレビ大阪がローカル編成出来るのは、ゴールデンの時間帯の、2曜日だけなんです。火曜と土曜。今ナイターやっているわけですが、火曜と土曜しかなくて。そこで、7月25日はネットとローカルの交換をテレビ東京で約束させて、テレビ大阪発のネット枠として、7月25日が確保できたのです。その日はテレビ大阪のお祭りです。当日、営業はお客さんを呼びます。技術局も大切な方々をご案内します。それから、編成は新聞記者を呼びます。もちろん、社長以下トップは日経のお偉いさんと呼んだりしていました。

会社中、祭り見物の特等席がたくさん取れました。窓側の部屋は全部そういう風に使われるんです。そして2年目からは、屋上を中継スタジオにしたんですね。

——— なるほどね。

<祭りの関係者に仁義を切る 生中継の根回し>

川越氏 解決しない問題もいろいろありました。お祭り独特の仁義の問題がありましてね。NHK がどれだけ仁義切って中継やっていたかどうかは知らないんですが、それぞれの講元さんに取材の許しを得に行くんですが、最初1年2年、お前は何者だと。話聞いてないってね。協力してくれないわけですよ。それには、参りましたね。ひたすら我慢ですわ。すいません、なんせ初めてなんで。すいません、ごめんなさい、来たばかりで、みたいな話でひたすらお願いする日々が続きました。

「どんどこ船」っていうのがあって、大勢の漕ぎ手がどんどん・・・32人ぐらいでやるのか。そこで訓練する映像とか、その事前取材とかね。それから、花火は花火講が仕切っていて、立川の親父っさんのいる、立川マイトという会社が天三（天神橋 3 丁目）にあって、そのお家に何度も通いました。がらっと重たい硝子戸を開けると、ショーケースがあり、ライフルがダーっと 20 丁ぐらい並んでいるんですよ。

—— えー、ライフルですか。

川越氏 鉄砲屋ですから。そこに木戸があって裏に回ると、親父が、ステテコに白い半袖の丸首着て。まあ、座れって言われて、話し出したら3時間ですよ。まず話を聞くことが交渉のスタート。東通企画の中山プロデューサーと二人で。

さっきの話に戻りますが、「どんどこ船」の講元は、住之江の木場にあるんですよ。気の強い漕ぎ手たちのまとめをやっている 講元、夏風さんのおうちは雀荘なんですよ。当然、ご挨拶に酒持って行くじゃないですか、まず、おばちゃんが出てきて、「うちのおとうちゃん、酒飲まない」。なんと、珈琲が好きなんです。次のお願いのときは、超特級のブルーマウンテンの豆を買ってね、持って行くんですよ、1週間空けずに。で、そうやって講元さんのところに通いつめると、好きになってくれ、話が進みます。特に、その、あの、おじちゃんたちにはですね、結構好かれるんですよ、不思議と。

—— なんか好かれそうな感じがしますけどね。

川越氏 そういう意味では、いっぺん失敗すると、次からは OK ですよ。すべて馴染むのに2年ぐらいかかりましたね。

まあ、救われたのは、お祭り本体の天満宮の宮司さん。すごくいい人でした。僕はたまたま、天八（天神橋 8 丁目）に住んでいましたので、うちの子供が生まれたときやなんかで、お参りは全部天満宮でやったんです。交通安全も。そこに中山さんっていう権禰宜さんがいらして、いわゆる報道対応の窓口で、その方も良

くしてくれたしね。だから、ずっと、今でも初詣は大阪天満宮、32年間続いているんですよ。

—— 伺ってみると、(天神祭というのは)簡単に中継できたわけではないんですね。

川越氏 そうですね。

—— 分かりませんね、なかなか。

川越氏 やっぱり、ああいう古い伝統的な祭りの世界ですからね。しんどかったけど、ネバってネバって人間関係がつくれてよかったです。結果的にはどんどこ船さんのお世話で、自由に川面を進める「カメラ・リポーター船」も、仕掛け花火のタイミングを放送時間に合わせてもらうことも出来るようになったんですね。僕が始めた頃は、(総合司会が)浜村淳ですよ。あの浜村節が合うんです。浜村時代が5、6年続いていたのかな。

—— まったりとしたね。

川越氏 浜村さんの司会をそろそろ変えようかなって思ったとき、カメラ船に乗ってもらうんです。スタジオじゃなく、船に乗って、船の上から最高の現場リポートを名調子でやってもらいました。そして司会には立原啓裕。ちょっとリフレッシュして。立原さんも3、4年やって、次に円広志と月亭八方師匠。そういう時代が数年あって、その次に登場するのが板東さん。

—— 板東英二さん。

川越氏 板東時代があって、後、ここ10年間はずっと西川きよし時代。1人のタレントと長付き合い。今年やって、もうおしまいじゃなくて、来年もね、再来年もねと。年1回のことですが、長いお付き合いになって、味方になってくれるんですよ。つまり、個人じゃなくて、テレビ大阪の味方になってくれる。そういうのを意識して長く付き合うんです。

—— でも、テレビ大阪の制作番組を作っていく様々の工夫をされたり、努力をされたり、アイデアをひねり出したりしてこられたんですね。

川越氏 そうですね。

—— それは、さっきおっしゃったように、番組を作りに行くんじゃないくて、局を作りに行くんだとね。

川越氏 それを基本に思っていないと。自分の番組を作っているんじゃないんですよ。ディレクターは自分の番組を作りゃあいいんで。僕は D じゃないから。最小限のチェックとかはしますけど、番組はディレクターに作ってもらうというスタンスで、もう、口出さないと決めたら、口出さない。そうしないと、同時にいっぱい番組は作れないですよ。いっぱい作った蓄積が局を作るっていう形で……。

—— 局になってきたなと思われたのはいつ頃ですか。

川越氏 5、6 年かな。やっぱり、タクシー乗ってね、テレビ大阪って言ったら、お客さんいい声しているね、アナウンサーですかっていったような冗談言いながらも、場所を言わなくても天満橋のテレビ大阪に着けてくれる。こうなるのに、やっぱり 5、6 年かかっているんですよ。認知されてきたかなっていう。

<在阪 5 局が初のリレー生中継 御堂筋パレード第 1 回制作秘話>

—— なるほどね、そういう具体的な経験がおありだったわけですね。さて、その中継のアイデアはテレビ大阪だけのことですが、今度はですね、第 1 回御堂筋パレードの中継というところに展開していきます。

【注】御堂筋パレード

第 1 回は 1983 年 10 月 9 日 民放 5 局が初のリレーテレビ中継

大阪北区中之島・大阪市役所前スタート、中央区難波の高島屋前まで

3.3 キロを舞台に、フロートによるパレード。

大阪府・市、姉妹都市を結ぶ海外の都市代表、国内の企業が参加。

川越氏 これに参加出来たというのも、認知されたって思いましたよ。マジに。4 局 (V 局) で出来た話じゃないですか。もっとスムーズに。でも、4 局だけだったら、もめにもめて 3 年で終わったと思いますね。テレビ大阪テレビが加わって、真ん中に、1、2、3 にテレビ大阪があって、4、5 がいるんですよ。だから、間に入ってですね、結構、テレビ大阪が緩衝材になっていたと思います、あるいは、川越が。プロデューサー会議で。

—— 何か、D 会とか、P 会とか、部長会とかいろいろ……

川越氏 だから、まず編成会議があって、編成が社長含めて決めてくる。こんなのをやるって。今度それが編成から制作に下りてきますよね、P（プロデューサー）をやるように・・・第1回は毎日放送が幹事。そういうようなことで、招集かかって、電通かなんかに集まって、大阪城・築城400年祭りの行事として、その趣旨からいろいろ話を聞くことから始まりました。

プロデューサー会議が、2週間に1度、半年以上前からスタートするわけですよね。その時のメンバーが、覚えている限りで言うと、毎日放送が能勢順さん、亡くなりましたよね。朝日放送が木村さんね、まだお元気で。間もなく松本明さんに変わったんですよ。それから、関西テレビは最初からだったと思うんだけど遠山伸彦さん。読売テレビは最初から今岡大爾さんかな。そこに川越が入ると、年齢的に僕より5つ6つ上の人ばかりですよ。

御堂筋パレードの第1回は1983年です。（テレビ大阪の）開局の翌年ですからね。僕37歳ぐらいですからね。当時、皆44、5歳じゃないですかね。今でもね、松本さんと今岡さんと遠山さんと川越というのは、年に1度ぐらいどっかで飯でも食おうかと連絡はとり合っています。

P会ができましたが、これは大変でした。各局でリレー中継です。まあ、いろいろな関係でいうと、朝日放送がスタート、11時からやって、読売テレビが12時から、関西テレビが13時からやって、その後14時からテレビ大阪が中継を担当、フィナーレが毎日放送という、第1回の流れですね。皆54分枠。

御堂筋パレードの主催者は21世紀協会、1982年に出来ているんですよ。あの大阪城の築城400年を前にして、大阪市が作ったようなものです。最初の理事長はNHK出身の人ですよ。

——— 今も。堀井良殷さんですか。

川越氏 でしたかね。要するに我々も21世紀協会とは打ち合わせしなければいけない、トップがNHKの方の組織と。

ところで、御堂筋パレードの中継カメラ位置のことですが、NHKも中継をしますの
でカメラ位置の調整が難しかったですね。カメラどっちにするっていうことで、NHKは東側からにしたい。朝から放送するので順光で撮りたいのでしょう。南に向かうパレードの左側にNHKが一行に並ぶんですよ。朝10時の開会式から午前中いっぱいNHKやるんです。もろにかぶっちゃったのは11時から放送の朝日放送ですね。じゃあ、民放は反対側、西側からですわ。視聴者にとってね、こんな不自然なことってないんですよ。NHKの画面ではフロートは右から左へ、民放は左から右へ。NHKを見ていた人が民放にチャンネルを変えたら、逆に走っちゃうんだから。

—— あれはね、在阪テレビ局の編成部長会にテレビ大阪の浜田さんが出てこられるようになったんですよ。

川越氏 テレビ大阪の浜田さん。この民放クラブでもお世話になっていた先輩です。

—— ABC が杉山さんだったかな、読売テレビが志賀さんで、関西テレビはどなただったか、とにかく、割に話がすすすっと簡単に決まったような覚えがありますね。

—— まあ、各局リレーが上手く出来るなんて考えてもみなかったですね。

川越氏 大阪万博でやってたですね、これに近いことを。もちろんテレビ大阪はまだ開局していない時代ですけど。

—— 万博は各局同時生中継でしたね。

川越氏 同時ですか。

—— 各局がリレー生中継するのは、御堂筋パレードが初めてです。

川越氏 そうでしたか。これがその後、数年間続くわけですからね。

—— これは東京の局ではなかなか考えられないことですね

川越氏 出来ないでしょうね。

—— そういう意味では、大阪だから出来たんでしょうか。普段はライバル同士ですが、やっぱり、こういうことになると一つにまとまるんです。

川越氏 一つになりますよね。例えば、編成部長会とか、スポーツ連絡会とか、各局間が結構仲いいですよ。そこは、大阪で固まって NHK をやっつけようなんて意識もあるんじゃないですか。ないのかな、僕はもう完璧そうなんだけど。

—— そこでまた、人脈が・・・

川越氏 プロデューサー会議と同時にチーフディレクター会議が当然出来ますよね。それ

から派生して、各局アナウンサーが出てくるわけですよ。広報用に 5 人全員で写真撮ったりして、アナウンサーも懐かしいですね。毎日放送では角さんと野村さんかな。朝日放送が乾浩明さん。で、関西テレビが桑原征平さん。読売テレビが羽川さんっていう。テレビ大阪は千年屋君でしたけど。それが第 1 回の布陣ですね。ディレクターは、覚えてる限りで言うと、ずっとその後も仲良くしてもらっていましたが、毎日放送の本多和尚さん、本多隆朗さん、お坊さんですね。それから朝日放送は松田安啓さん。今、役員でしょう。彼なんか若手で、面白いやつで、良かった。それから、残念ながら、亡くなっちゃった、関テレは苧木晃さん。

—— 朝の番組やっていた。

川越氏 そうそう、ワイドショー「痛快エブリデイ」担当していましたよ。若くして亡くなりましたね。でも彼が亡くなってからも、ずっとエンディングに、企画として名前が入っていたんです。これで関テレ好きになりました。

それから、読売は複数いらっしゃってね、松本さんとか。皆、元気で生意気で面白い人たちばかり。そんなディレクターとの付き合いが面白かったんですよ。プロデューサーたちが 7、8 歳、上だとしたら、僕がいて、7、8 歳ぐらい年下のディレクターがいた。要するに、P 会と D 会の連絡員ですよ。プロデューサー会議でこう決まったから、皆でこれを議論して頂戴って。議論が終わるまで待っている、口も挟むけど。結論を持って、P 会に持ち帰り、説明して。それをやらせてもらったので、みんなと仲良くなりました。

—— そうですか。横のつながりありの、縦のつながりありの。

川越氏 こんな大きな仕事は、東京か大阪でしか出来ない。でも、気質からしたら、大阪でしか出来ない、5 局で出来るのは大阪でしかないんです。すごいんですよ、技術陣も、そのとき初めて東通の機材をエキスプレスが使ったり、エキスプレスの機材を東通が運んだりしたんですから。もう、この業界挙げて、大共同制作でした。

—— 大運動会みたいで、楽しそうですね。

川越氏 各局、それぞれ個性があって面白かったですよ。毎日放送は結構、調整型でね、お人好しが多いんですよ、特に P、D その辺の。朝日放送は、結構、排他的でね、もう何回も会っているのに、朝日放送へ行くと、ロビーでお待ちくださいって、応接で打ち合わせなんですよ。他の局は、ああ、上がったいによって、デスクまで上げ

てもらえるんですよ。ABC だけは中に一切入れてくれない。だから、ちゃんとして
いるんだと。

—— ちゃんとしているんだ。

川越氏 だから、そういう局だと。そういう文化だと感じざるを得なかったですけどね。
やっぱり関テレはお調子者で、場当たりでしたよね。ほんとそう思いました。

—— すみません。

川越氏 最後の読売テレビなんですけどね、いろいろな会議である程度話が決まるんです。
話がどんどん決まって行って、もう、ぼちぼち時間だしと思ったら、ドーンと
雑ぜっ返して振り出しに戻す。もうわがままで、雑ぜっ返し屋が多かったですよ。

—— 局によっていろいろな体質があるんですね。面白いですね。

川越氏 面白かった。もちろん、やり方の違いと意見の違いで。面白かったんですよ。

<やしきたかじんとのお会い 「今夜はうしみつ族」で司会グループへ>

—— さて、真夜中の、丑三つ時ならぬ、「今夜はうしみつ族」という番組がありまし
て、ちょっとお色気、大分お色気だったのかな。

川越氏 大分お色気ですね。

—— カルーセル麻紀とですね、ここで今日のタイトルにあります、たかじんさん。今
日のサブタイトルが「天神祭、第1回御堂筋パレード、そして、たかじんとのお
会い」というタイトルでご案内していると思うんですが、ここでやしきたかじ
んさんとの出会いがあります。若かったんでしょうね、おいくつだったんでしょ
うか、たかじんさん、その頃は。

川越氏 この番組 1984 年ですから、30 代ですよ。たかじん 30 代、ある程度はラジオで
は売っていたんですよ。

—— ここにちょっと記念写真がありますけどね。

川越氏 ちょっと暗いですが。ただ、東京へ出て、戻ってきて、ラジオで鶴瓶さ

んやあの辺と遊んでいた時期じゃないですかね。

——— この話を、実は、川越さんは、最後にしたいなおっしゃった。

川越氏 大阪で番組作るときに、他局のキャスティングも見ると。やっぱり最初嫌だったのは、真似したくなかった。同じ物は作れない。あれだけ大勢のタレントを呼ぶのは無理だし、スタジオも小さい、というところから、5人も6人も芸人さん集めて、ベテランの芸人さんが司会してなんて番組では、勝負出来ない。そういうこともあって、じゃあ、どうしようかなってときに、やっぱり自分でメイン司会を探すしかないって意識がどこかにありましたね。

当時、全自動麻雀卓を雀荘にバンバン納めている景気のいい会社が、深夜で番組を持つことが出来そうだって、営業から情報が入って、それをキャッチしてね。深夜でお色気番組やろうと。お色気平気な時代で、おっばいまでは結構出している時代でしたから、まあ、特にテレビ東京「独占！おとなの時間」だとか、「突然ガバチョ！」(毎日放送)とかね。サンテレビでもね。結構お色気系があって、「11PM」(NTV-YTV)から始まっているんですけど。

当時、ジャップスの林誠一さんのところで、別の番組をやっていたんですけど、林さんにちょっと話したら、そういう企画一緒に練ろうやという話になった。林さんは、カルーセルなんかともよく付き合っているんですよ。カルーセルが新地で店やっていたんですよ、で、カルーセルが出てもいいんじゃないって。番組名とかいろいろ決めていく中で、2時でも3時でもいいから、うしみつ族にしようやと、じゃあ、カルーセルの相方どうすんのってときにね。リアンって知りませんかね、新地の店。そこに、芸人さんたちが飲みに来たついでに、ステージで、結構いろいろやっていたんですよ。僕もたまに、構成作家やなんかと一緒に気晴らしに行くこともあって、そこにいたのが、たかじんだったんです。歌はもちろん上手い、けど歌よりもMC、途中のトークとか、客との掛け合いとか、もう、むっちゃくちゃ達者でね。そこで、もう、たかじんにしたくなった。使いたくなったんですよ。

カルーセルのOKも取り、たかじんでやることになった。そりゃあ、濃いですよ、カルーセルとたかじん。もう、こてこてに濃いじゃないですか。編成は収録(生放送でない)でもいいという話だったんだけど、テレビは生だよ。生に限るって。終わったら、台本放り投げて帰るんで。もう絶対生でやろうって。

麻雀台のメーカーがクライアントですから、スポンサーのメリットみたいなものも当然提案しなくちゃならない。で、局のロビーの「ナインティーン」っていう喫茶室が、受付の上にあったので。そこに、電動卓を8卓ぐらい入れたのかな。

—— あっ、あそこに置いてあったんですか。

川越氏 置いたんです、金曜の夜だけ。自由に使える雀荘をオープンしたんです。

—— 普段は喫茶になっていまして、喫茶店のテーブルが置いてあるんですけどね。

川越氏 実際、卓を生かして、タレントのマネージャー、芸能記者、放送担当の記者。あとは番組に関係ないけど、勝手に来てくれるレコード会社の宣伝マンとか。あるいは、マージャン好きな芸人さんとか。勝手に来るようになって、金曜日は麻雀大会なんですよ。番組とは関係なく。もちろんそこにもカメラ入れるんですよ、1台だけ。スタジオの進行と、CM 前にそっちへ行ったりして、勝ってる、負けてるみたいなの。そういう仕掛けをやったりですね。放送は 24 時 55 分から 2 時半が原則なんですけど。その後放送がないもんですから、もう技術局は怒りましたが、放送終了時間決めないぞと。番組のノリが良かったら、延長することもあり得るよという、とんでもないことやっていたんです。そういうやり方に、新聞記者食いついたし、たかじんもそれに食いついてくれたんです。麻雀生中継と終了時間無しっていう。

—— たかじんさんとは、その頃、それからずっとお付き合いがあったんですか。

川越氏 僕はあんまり、べたべた付き合わないんです。必要なときに必要なだけ付き合うようにしている。だけど、ディレクターたちはもっとべたべたになれと。この「うしみつ族」は残念ながら 2 クールで、12 月末に終わったんですが、なぜ終わったかという、テレビ東京の社長（当時会長になってたかな）が、民放連の会長になったんですよ。それで、自分のところの局もそうだけど、お色気廃止という空気になって。それから、テレビ東京も激しいのはやっていないですね。「今夜はうしみつ族」、今、ネットでお色気番組って検索すると、年代別お色気番組というので出てくるんです。80 年代の 10 本の 1 個に入っているんですよ。放送は、たった半年なんだけど、感動した。しばらくして「テレビ大阪しっかりしてきてたんだな」と思う証としてあげたいのは、新卒の入社試験、面接試験がありますよね。「テレビ大阪の番組をえていますか」とか、「よく見ているのはどんな番組」とかの問いかけに対して、昔「うしみつ族」見ていましたと答える学生がいたんですよ。つまりまだ、彼は子供のとき（今大学生だけど）見てたんですね、それは感動しましたよ。やっぱりこれは局の歴史だし。

—— そんなに長くやっていた番組じゃないのに・・・そのとき見ていたんですね。

川越氏 その見ていた人の正面に自分がいるという、このいい感じ。

—— それと、その、年代を超えたものもね。

川越氏 で、僕はその人に5点つけましたけどね。

—— 入りましたか。

川越氏 分からない……。そういう人に限って、成績悪いんじゃないですか。

同じように歴史を感じるがあったのは「フィッシング」っていう、今でも放送している釣りの番組。あれも開局直後からですから、もう30年近いですね。ダイワ精工がずっと支えてくれているんです。

20年ぐらい前に、フィッシング甲子園っていう企画を始めたんですよ。イベントも含めてね。高校生たちが学校単位で磯へ行ったり、海へ行ったり、川へ行ったりして、途中クイズがあって振り落とししたり。決勝戦は海外で釣りバトルという大きいイベントになって、5年ぐらい続いていました。その後、10年ぐらい経ってから僕が事業局長のときに、アウトドアフェスティバルというイベントをやってみて、ステージのトークショーがあるんです。釣りのプロを呼んで。そのとき、講師に挨拶に行ったら、「フィッシング甲子園に出てたんです」と言うのです。彼は釣りを仕事にして、バスプロとして出世していると。それも、嬉しかったですね。高校生でフィッシング甲子園に出て、釣りの世界に入ってきて、今プロになっているという。

<築き上げた人脈 後輩プロデューサーへ引き継ぐ>

たかじんさんの話に戻すと、「うしみつ族」では、司会といってもメインじゃなくて、カルーセルの相方でしたけど、その翌年、お昼のワイドショーを、1曜日を大阪で作ることになって、大阪から東京に上げるんだから、やっぱりたかじんでいこうと、たかじんに出てもらった番組が「お昼だドン！」という生情報番組で、毎週木曜日にテレビ大阪の制作で全国ネットしていた番組でした。

この番組を担当したのが開局時に入社した、たった一人のディレクター森川です。司会はたかじんと吉本新喜劇の末成由美姉、濃いキャストで東京をびっくりさせようと思っていました。

それから20年ほど、たかじん絶頂期に達していた頃かな、後輩の後輩、徳岡ディレクターから電話があって、開局25周年特番にたかじんでやりたいと。プロデューサーもたかじんでやりたいと。彼はハワイまで行って、たかじん口説いて特番

成立させましたね。

この流れで、たかじんとは、テレビ大阪での3本目のレギュラー番組「たかじんNOマネー」に、まあ、今でも放送やっていますけど、出演OKとなったんですね。開局直後に、たかじんを使った川越というのがいてですね、当然仕事上も後輩になる森川が、その、たかじんを受けて、次のお昼の番組、東京発に突っ込んで。その後、ずっと後輩の徳岡も、いつかたかじんを使おうと。それで、特番で成功させて、レギュラー化した。つまり、川越がおじいちゃんなら、森川は息子で、徳岡は孫ですね。そういう関係って素敵だなんて、僕はずっと自分も経験して思っているんですね。

テレビ朝日、NET時代にも、僕はADですから、ディレクターに付くんですけど、そのディレクターも昔AD時代にディレクターがいる、つまり僕のディレクターが付いていたディレクターがプロデューサーになっている。僕はその孫だと、そういう関係も一つの会社の中で流れとしてあれば、何か伝わっていくのかなっていう風に思っていますね。

——— そうですよ。まあ、ある日、誰か連れて行くって言われて、川越さんが選ばれて、大阪に来られて、そして、番組を作り始めて、こうやって子ができ、孫ができという流れになってきたわけですが、大阪に来られて得られたもの、それから大阪に、やっとなんか大阪に根を下ろしたなって、お感じになったのはどんなときでしたか。

川越氏 得られたものは多々あって、絞り込めないですね。やっぱり、実感として大阪という所に自分がいるんだっていうのを認識したのは、ほんとにテレビ大阪、最後の最後、65歳で退任したとき、さっき言った森川が中心になって、大送別会をやってくれたんですけども。プロダクションの人も、タレントさんの一部も、それから、局の方々も、他局の方々150人も来てくれたんですけど。そのときに、最後の挨拶で「皆さん、今日は来てくれてありがとう。今日、初めて大阪に来て良かったと感じました。今、感じました」というお話をしたんですが、確かにそのとき感じましたね。大阪へ来て良かったって。

——— 大阪に来られて30数年の時ですね。

川越氏 30年弱ですね。30年ぐらいかな。

——— 今のテレビ大阪をご覧になって、お感じになることは何かございますか。

川越氏 今も「たかじんNOマネー」の放送中でもあるし、他にもテレ東に負けない番組が作れている。やっぱり、子供もほっときゃあ能力あるものは作れるようになるんだなという風に思うから、あんまり構わないようにしているんです。

< “テレビに見るものない” の意見に

見る側にも“探して見る” 努力必要 >

——— このメディアウオッチングのメインのテーマが、高齢者向けのテレビの必要性について。もう今やテレビは高齢者のお楽しみではなくなっているのだろうか、なくなってしまったのか、という論がありまして。ということに関しては、川越さんどんな風にお感じですか。

川越氏 見ないだけでね、探して見てくれたらいいと思うんですよ。そりゃあ、毎日漫才見ていたら飽きますよ。だから、それは、やっぱり見る側にも努力が必要なのが地上波じゃないですか。まあ、これからのテレビは、見る側の努力が必要だと思いますよ。努力しなかったら、面白いものなんか見つかりゃあしない。

——— ご自身ではよくテレビはご覧になられますか。

川越氏 見ます。何時間でも見えています。

——— お気に入りの番組って何ですか。

川越氏 あんまり決め込んで見てないですが、「ケンミンショー」(YTV) とかね、面白いですよ。「よ〜いどん となりの人間国宝さん」(KTV) , 「ちちんぷいぷい」(MBS) 「探偵ナイトスクープ」(ABC) 録画していますし、あの辺はやっぱりスタンダードじゃないですか、年寄り向けの。

——— あれは年寄りから子供まで、結構面白い番組ですね。

川越氏 あとは、やっぱり、アメリカを中心としたスポーツ中継。今朝も、田中、7回まで2点で、10対2かなんかで勝ちましたよね(アメリカ大リーグ)。

——— 今日は、テレビ大阪の川越さんにいろいろとお話をお伺いしました。

川越氏 すみません、とりとめもない話ばかりで。でも、「お悔み」はね、今回のテーマに沿った、隠れた名番組だったと思います。二度とないです。

—— ご覧になった方はいらっしゃいますか、「お悔み」。

—— あれは覚えているよ。

川越氏 そうですか。青い画面に白い字が出てきて、それだけですから。

—— 番組をね、一つの出来上がったお料理という風に、もし例えるなら。

川越氏 それ正解ですね。

—— たかじんという素材は、どういう風に料理をして、どんな味付けをして、最終的に盛り付けて、できるのがいいと思われるんですか。

川越氏 素材だから、まんま食っちゃうってのがいいですよ。

—— 生ですか。

川越氏 生で。

—— お刺身ですか。

川越氏 まあ、切り刻むわけにはいかないけれど。

まさに、プロデューサーはお店のオーナーですね、料理屋の。板前はディレクターですよ。だからオーナーは鯛を買ってくる、フグを買ってくる、たかじんさんという高級食材を買ってくる。そしてディレクターの板さんに渡す。美味しいやつをお客に出してくれて。ということです。

だから川越に具体的にどうしたらいいって聞かれても、あえて答えられないかな。もうディレクターに預けたんだから、プロダクションに預けたんだから、制作に。というところで、プロデューサーとディレクターというのを、後輩たちにそう伝えていきますけど。そうやって考えなさいと。だから同じ素材が鯛であっても、プロデューサーによっちゃ、「俺はイタリア料理をやりたいんだ」「俺は蕎麦屋をやりたいんだ」といろいろなプロデューサーがいるだろうから、同じ素材であっても、ディレクターに、イタリア料理も和食もみんな勉強しておかないといろいろな番組できないぜ、って話し方しています。

素人に「Pって何ですか。ディレクターって何ですか」ってよく聞かれるんですよ。それ喋ると一番分かりやすい。プロデューサーはオーナーさんですよ。ディレクターは板前です、あるいはコックですと。そうすると、皆、結構、素人でも分かってくれる。「PとDって違うんですね」って。

——— すみません、つまらないこと聞いて申し訳ありませんが、「うしみつ族」でね、麻雀やっている人たちがいますよね。番組終わってもまだやっているんですか。

川越氏 それは適当にずるずるずるっと。

——— そうですか。ということで、4時にあと4分ばかりとなりました。ではこの辺りで。

川越氏 すみませんでした、とりとめもないお話で。

——— いえ、ありがとうございました。

以上